

人間的な基督

吉村勝露生

人物

基督

ユダ

弟子達

祭司の長、メサモロ殿司外に男女數名

時代

西曆紀元前

第一場

ゲツセマネの園

小廣き草原、草原の涯には常綠樹が稍密に植ゑてある。その間に、遠山が、傾きつゝある太陽の光を受けて、輪廓をハッキリ描いてある。右の方に、麓に下る小道が一條、曲りなりになつてある。

弟子供はキリストと祈つてゐたが、飢と疲の爲に、祈禱の姿のまま、居眠つてゐる。基督は獨り、弟子達と離れて、左の方で踞つて痛く悲しみ祀つてゐる。

瞬時にして立上り、弟子の方に歩んで来る。

基督

オイ／＼！ どうしたのだ！ あれ程、サタンの張つた迷惑に、掛らない様に、一生懸命に祈るやうに吩咐けたのに……、氣持良ささうに、今迄の迫害苦痛飢餓等の受難をも、忘れた様に、安らかなイビキをかいてゐるな。

(云ひつゝ、弟子共の寝顔を見る。)

……。俺の奉ずる神はその寝顔だ。無爲の境に忘我の域に彷徨する心の持主だ。起すのも可哀想だ。そのまゝ寝させてやらう。

ア、何と靜かな日だらう。あの森の木に訪ふ風の音が聞える様だ。あれは草叢から出た虫だな。又白い花、黄紅色な花、サウ／＼あの花を摘んで花輪にして、母さんへ上げた事があつたつけ。虫を捕へて喧嘩させたり、虫の取合で、友達と組打逆した事もあつた。

あの日の友達は今どうしてゐるだらう？ 矢張り、ベツレヘムで、彼の野原で遊んでゐるだらうか？ 俺の事を思出してゐるだらうか？ 生れた土地に抱れて、生きて行く人は幸福だ。羨しいな！ 夫に較べて、俺と云ふ者は、生れる時から、恵まれなかつた。社會の人々と伍する様に許されなかつた。馬鹿な博士共は一狸か狐に騙かされて一東の國から、ワザ／＼来て、俺を一大工の子を、神の子と云つた。但だ、星が俺の産屋の上うぶやに在つたからださうな。お蔭で、イチブト三界迄、逃げ、夫からと云ふものは、いつも追はれて逃げる様な生活をしてゐる。木蔭で、夜露を浚いだ事もあつた。草藪の中に、モグリ込んで、野獸を避けた事もあつた。俺の心は絶えず何者かと脅してゐる。バリサイ人の獐猛な、血に渴へた、狼の様な奴の影法師が、俺を取巻いてゐる……。

今日は、總べての桎梏から逃れた時、囚人が軽い、浮々した氣持で、足を踏み出した時、四股を踏んだりする様な普通の人味が味ふ事の出来ない、自由の身を感じする様な氣分がする……。段々暮れかゝるな。山々が、身體一パイに光を浴びてゐる。金色の彩雲！ 眞赤な太陽！ ア、愉快だ！

愉快さうに大勝で往來する。鳥が二三羽羽バタキして過ぐ。此静けさに對して、夫は脅威的な騒音だった。

畜生!!

衝動的に石を拾つて投げようとする。が氣がつき、弟子達が目を醒まさないので、ホッとし、力なくグツタリ、坐りこんで兩手で頭をかゝへる。

情ない! 俺は、俺はさうまで自己の心、意識作用を打潰ぶさねばならないのか。俺は、人間的な慾望を、「神の子」の文字と帳消にした。本然の性を、意識しながら破壊した。こんな—さうだ、俺は變體的とも云ふ—例外的な性を偽造した。此んな虚飾した奴を、俺はイツハリ、世の人々に美しく、純なものとして、見せるために、神の攝理だとか、我父の訓と云つた。俺は若しも、その動機を聞かれたら、無意識だと云ひたい……。

あいつ奴! バブテイスマのヨハネの奴! 俺がこんな、非人間的な生活の緒を開いたのも、阿奴の口車に乗つたからだ。ヨルダン河で、群集心理に動されて、水を浴びた、バブテイスマとやらをやつたら、阿奴、悪賢しくも、「私は貴方の靴の紐を解く事も出来ません」と、煽て、口上手に、俺にその役目を譲つた。其時俺も馬鹿だった。宇頂天になつて、神様見たいな事をやり、自己の凡人たる事、無能なる事も忘れ、自己の眞實な心が、蟲ぼんで、竟には他人と反對の事を云ひ、云ひ負かすためには、心にも無い事を云ひ、變體心理の人間になつて、如此く、喪家の狗の様に、歩いてしまふとは知らなかつた。そして俺の心は世に反抗した。彼等が迫害すれば、する程、俺の心はヒネクレた。すべて、彼等の行動の裏に出た。俺さへ知らぬ、神をも無條件に肯定した。學者、祭司の長共が躍氣になる程、心に快哉をさげんだ。人をへこましたりするのが好きになつた。排他的は病的になつた。

財産家が成佛を頼んで來た。彼奴は、道德的に、人格的に優越してゐた。そこで俺は彼奴も、普通の人間、無産者に下げ優越感を味ふため、汝の有する財を捨てよと、云つたら蒼白うなつて逃けた。俺は、「富者の天國に入るは

駱駝の針の穴をヌケルより尙難し」と、云うて溜飲を下けた。又かう云ふ事もあつたつけ。町で姦通した女を、人々が石で打殺さうとした。俺の心は擡頭した「お前等、罪無き者、先ず彼を打つべし」と、やつたらコッ／＼逃げやがつた。俺は見ているにいけない者を見る様に、弱々しいが、アダッポイその女を見た。俺の目は淫邪の光で輝いてゐた筈。俺の心は狂つた。人並に女を戀うた。が女は俺を人間以上に見た。木石の金佛位に見た。すべて善の方面を見、神と云ふヴェイルで包んで、人間と云ふ者を見なかつた。彼女は戀情を捧げる代りに尊敬の情を捧げた。その時、俺は何となく悲しみの奈落に突落された氣がした。女と云うと（目は活々として来る、何物かを戀ふ様に）あのマグダレナのマリヤが戀しい。夏のカン／＼と照る日、喉が渴いて、井戸に水を飲みに行くと、女は水を掬つてゐた。スレタ所もあつたが、處女のオボコさもあつた。弟子一人も居ない。誰一人として俺を、救世主と云はれる俺を知つてゐる者は居なかつた。俺はビク／＼しながら、水をお呉と云つた。女は甕に手をかけた、俺は無中で眞の、俺の姿で手でくんで呉れと云つた。その時、もう相手の顔はノツペラボーに見え、飲んだかどうしたのか、わからない程だつた。其時の狼狽さ―その時の氣持！ 恐らくは世人の戀と云う者だらう―。彼女は娼婦だと云つた。が俺には初戀の人だ。潔白とか、汚穢は問題ではない。其時初めて説教―眞の説教をした。兄が妹を諷すやうに。彼女の目が俺を見つめた時、彼女は神々しかつた。邪念が一掃されるやうだつた。だがあくまで俺は恵れなかつた。ユダの奴が来て俺の心を讀んでしまつた。阿奴は恐しい奴だ。必ず俺を裏切る。俺を賣つて、マリヤを物にする筈。阿奴もマリヤに戀をしてゐるから……。負けてたまるか！ 俺のマリヤだ！ 糞!!! ユダの奴！ どうにかしてやるぞ！

山道からユダ先頭に立ち祭司殿司共と話しながら来る。彼等はエモノを持つてゐる。基督、ユダの聲を聞き、ハネカヘサレル様に飛上り身を地にスクマセ、ひそかに聞く。

何!! 色と慾の二道! マリヤと銀子! 畜牲! とうく、俺を打負したな……。なあに、腕づくなら五分々々だ。あのマリヤ、可愛いマリヤを誰に……。ヨシ! 死ぬまでだ。

沈黙稍冷靜になる。

が、俺はこんな事で、彼女を得ても……。俺の今迄の努力は水泡なのだ。俺は世人に何と教へた。「己の敵を愛せよ」と云うたではないか。女一人! 私の情だ。俺は名が惜しい。救世主の名が捨てたくない。俺はヨリ大なる愛の世界に生きねばならぬ。些細な感情を捨てねばならぬ。宇宙の人を抱擁する博愛の創造主たらねばならぬ。博愛だ!

ユダ、イエスに來り、接吻せんぞす。人聲に、弟子共醒め基督を防衛せんぞす。

基督 ユダ! お前は接吻を台圖に俺を、神の子である俺を賣らうとするのか?

ユダ……。 (たちろき、キリストの顔を見て俯く)

弟子達 主よ! 刀を抜いて、サタンを追ひ放つて宜しうございますか?

弟子の一人、躍出し祭司の長の僕を傷く。

基督 待て! 宥してやれ。(祭司殿守の前に進む。)

お前等は刀や棒を持つて、丁度強盜に向ふかの様に來てゐる。宛然、俺が超人的な精力を有してゐるかの様に……。がお前等は、殿堂に居る時、指一本すら、さそうともしなかつたのにね……。

四方は段々暗くなり、トツプリ暮れる。

スツカリ暮れたね……。眞暗だ。誰やらサツバリわからん。善も惡も、明も暗も歸する所は此暗の色だ。人間も毎日此暗のトバリに向つてゐるのだ。

俺も今度は、人間並に、此暗の色に包まれて、二度と明るい色は見られん様な氣がする。到々、人間的な、死に對する

恐怖が勃つたな。アハ、ハ、ハ。さあ行かう。
危い！ 皆氣をつけろ。道が悪いからね……。

キリスト下る。祭司、弟子達、無言で後に従ふ。

第二場

コルゴダの刑場

中央に、丘陵が遠く小さく踞つてゐる。小廣き草原、所々地膚が露はれて、濕つてゐる。右手に、殿に通ずる道あり。道に沿つて、多くの女共、三々五々さ、或は立ち、或は坐つて、話をしてゐる。その側に、男数人、輪になつて、話をしてゐる。時、正午近い。

女一 ほんとにさ！ 大それた事を仕出かしたもんだよ。罰當り奴等が。何んほ何だつてあんなバラバ見たいな大悪人——一寸切、五分切して食つても、厭きん程にくたらしい狼の野郎——を無罪にしてさ、生佛様のエス様を十字架につけるなんて……。畜生阿奴等皆、くたばつてしまつた方が良いんだよ。男の癖に、ゑらさうに口鬚もつけてさ、夫位の事がわからん事があるもんかね。一丁字も知らん、妾なんかでも是非善悪を見分けるのは朝飯前だよ。今に見るがいき。神罰を受けるから……。

女二 さうだよ、お前さん。犬畜生におとる奴等だ。どれ程エス様にお恵みを受けたかわかりやしないんだよ。夫なのに、今度の始末は……。實際、犬も三日飼へば恩を忘れんと云うのに。没義道の野郎共は地獄に落つこちたが良

女三 可哀想に、あの神の子様も、もう今日限りで、此世ではお目にかゝれん。なあ、皆の衆や。エス様は、何時も、さうおつしやつた。汝の敵を愛せよ。皆仲良く暮らせ。四海兄弟とね。又どんな貧しい人でも、其日其日に追はれる私達でも、悔改めて、悪い事をしなければ、永遠の命を受ける——。チト、難しいかも知れんが、要するに、天

——幕——

國と云ふ、神様のお國でいつまでも生きることが出来るさうだよ。人間は心が大切だよ……。

エス様は優しいお方だよ。私見たいな、ヨボくした者にも、もつたい事だよ、お自分で祀つて下さるし、優しい言葉を下さる。私エス様の事を思うと、有難いやら……尊いやら……嬉し泣をしますよ。シャクリあげる)

女一、二、引入られて泣く。女一、基督を見る。

女一 あれく。皆さん。エス様がお出になつた。さあ、お迎へしませう。

シモン、十字架をかつぐ。基督、平素の様に來る。路傍に泣き悲しむ女共を見て、奇異を感じる。

基督 もしく。どうなすつた？ 悲しい事や、心に心配ある人、死を恐れる人はお出なさい。元憤してはいけません。靜かに、貴女達自身や、お家族のために祈りなさい。祈にまさる何物もありません。天の父は必ずお聴きになるでせう。(云ひつゝ、歩いて行く)

女共は、優しい言葉に一層、シャクリ上げて泣く。男達、エスの後姿を見る。

男一 どうだい！ 野郎のニヤくした様子と云ひ、糞度胸の良い事は。十字架はてんで眼中に置いてるないぢやないか。死刑なんて糞食へで問題にしてやいななんだ。

男二 知らぬが佛とは奴さんの事だ。一時間もしたら、三尺高い所でお陀佛とくるんだから面白えや。夫にさ、悲しい者、心配ある者までは良いさ、死を恐れるとはどうだい！ 虫の知らせかな。死を恐れない奴があるもんかい。

男三 さうだく。俺なんか、お役人に一寸にらまれても、ゾットする。一度でも、戯談で死刑にしてやると、云はれて見ねえ。たまけて死ぬかも知れねえ。夫に阿奴！ 殿守様方の宣告なんか、屍とも思はん。豪氣ぢや無えか。一體阿奴は、馬鹿か、白痴かも知れねえよ。

男一 だが阿奴は薄氣味悪い野郎だよ。悪魔の親玉かも知れない。氣狂をなほしたり、中風を治したり……。

男三 夫にパンの四つで三千人も食べさせて、残つたと云ふぢやねえか。

男二 あれや、二人位食つて、外の野郎共は見てゐたとはちがうかい。

男一 何にしても、變な奴さ。

或地點に到る。駈守達は互に目配せする。一同の顔は決意の情に漲り、殺氣は濃くなる。急に飛びつく。十数分の争の後、エス二二三間離れて立つ。

基督 何をなさるんです！ 初めは戯談と思つてゐたのに……。ご覧！ 此衣の裳や、袖はボロボロではありませんか。

見つとも無いぢやありませんか。(靜かに衣を正しくし、平靜な態度をさらうと努める。)

どうしたんです。だしぬけに——喉を締めたり、腕をねぢたり、呼吸も出来ん位、人を苦しめて……。宮に仕へる人にも似つかぬ、追剝同様な事を白晝やるなんて。以後お謹しみなさい。が、過は誰でもあるのです。皆さんの……。(急に何物かゞ頭にヒラメク。相手を見て、ハットし、恐怖の狀顔を襲ふ。)

恐しい眼だ！ 曠志の焰が燃えてゐる！ 憎惡の迸つた眼光！ チリ／＼と胸に鏝をあてられる様だ。アツ！
一、二、三！有る、有るオツ！ 俺の周圍を取卷いたな……。

沈黙

俺をどうしやうと云うんだい。俺を知らんか？ 神の子を知らんか？ 奇蹟を行つた俺を見違つたのか？ 力を見たいか？ 神の力を疑うのか？ 歸れ／＼！ あつちに行け！

駈守尙チリ／＼肉薄す。

ねえ諸君！ 戯談も此位で止して呉れよ。ほんとに。俺見たいな臆病な者には、殘酷すぎる脅しだよ。その様な目付をして下れるな。頼む！ 呼吸も出来ん位壓せられる様だよ。アツ！ お前等の目は曠志や、憎惡の焰は消えた。

その代りおう、おう恐しい！ 殺……殺氣が漲つてゐる。やる氣か？ 俺を！ 俺を殺す氣なのか？

貴様達はサタンの手足となつたな。お前達は自己を失つてゐる。認識力が麻痺してゐる。俺は！ 俺はもう見る事は出来ん！ 恐しい！ 駄目だ！ 駄目だ！

バツタリ倒れる。殿守達たりさおどりかゝり、衣をうげひ、棘の冠をかぶせ、紫の袍を着せる。しばらくして、エス、氣がつく。

基督

……矢張り……。 (靜かに起きる) 痛！ 棘の冠か！ アハ、ハ、ハ、ハ。 (淋しく笑ふ) 紫の袍は、チョット派手だな、が新

しい衣はさつぱりして、氣持が良いもんだ。何だか他人になつた様な何かしらん懐かしい氣持がする。子供が正月着の衣を抱いて寝る時の氣持が又味はられる。愛着が感ぜられる。

フト十字架を立てる音に氣がつく。

あの音だな！ 俺の死の行進曲だな。段々死の三番叟が始るらしい。だが、俺自身が死ぬとは思はれぬ。第三者の位置に立つてゐる様な氣がしてならぬ。成可くならさうありたいもんだ。死にたくはない。何故と云う事はない。死にたくないだらう。一體、死とは何だ。今迄死と云う事は、頭に爪ほども浮ばなかつた。又その必要もなかつた。が皮肉だ。死を救ふてやる人が死ぬ。そして救ふべき人を持たぬ。人々は俺を求めた。俺は誰を求めやうか死ぬ！ 死、夫は生きる、生と同じではないか。又人生の目的だ。人は生れる、夫が死の初段階、スタートでは無いか？ 死ぬために生れる。俺が死ぬ。不思議もない。當然すぎる當然だ。が、ミミズは首が切れても身體が二等分、ズタ／＼になつても生きてゐる。イ、ヤ、生き様と努めてゐる。生に嘔り、どうかして、生存を續かそうと一生懸命になつてゐる。又人間の斷末魔の、口惜しさうに、しがみついても生きたいやうに食ひしばつた口、カット見開いたまゝの目、何物かを取らう、攫ふと虚空を——取つても、攫んでも無駄な空間を根氣よく、屁古垂れず、攫ふとあせつ

たらしい手！苦痛の最大限を盡した顔の筋肉のツリ具合……。

沈黙

手の甲がザラ／＼した。毛が立つて来た。冷水を浴びた様だ。——逃げたい！ どうかして奴等を殺してでも逃げたい。イ、ヤ、生きて生きぬくんだ。殺されるなんて……。

隙を伺ひ逃げやうとす。が捕へられて刑場に引られる。

基督 残念だ！ 殺す氣か！ 俺にあの様な苦痛をなめさせるのか！ 俺は生きたい。誰か……誰か、俺を助ける奴は

居ないのか……。

弱虫！ 恩知らず奴！ 卑怯者！ 苦しい！ 生きたい……。

やがて刑場に姿は消える。女共、十字をきて黙祈す。

男一 アハ、ハ、ハ。良いはまだ！ 普通人より一層人間味があるぢやないか。

男二 もがいてゐるよ。エヘ、ハ、ハ。ユダヤの王様とさ。

男一 ユダヤの王様かね、榮光彼にあれ。アハ、ハ、ハ。

男三 イヒ、ハ、ハ。ユダヤの王様！ 萬歳！ イヒ、ハ、ハ。

基督のウメク聲、物狂しき笑聲、人々のス、リ泣の中に

幕。